

# エラスムス覚え書—文献紹介と課題

## 根占 献一

ロッテルダムのエラスムス (Erasmus) はルネサンス人文主義 (ヒューマニズム [英]・ユマニスム [仏]・フマニスムス [独]・ウマネジモ [伊]) に関わる研究者には魅力ある人物である。アキッレ・オリヴァエーリ (Achille Olivieri) は、エラスムスについて話し、論ずることは魅惑的な宿題であり、深めたり、確かめたりすべき課題と過程に満ち満ちている、と語った<sup>1</sup>。多くの精神的諸問題と関わるほどの著述活動と行動生活を行なった人物が、このエラスムスであった。今回、以下のような文を綴って、ささやかながらも自らの覚え書を作成することにした。それは、エラスムスが著わし、またエラスムスについて著わされた膨大な文献を前に、幾らかなりとも、自分なりのエラスムス像を結んで、研究に向かう心構えとしたい一心からであった。

### (一) 研究上の視角

近代の数々の精神的諸問題とはなにか。先ず、14世紀のペトルルカから始まる人文主義の系譜のなかでエラスムスの占める位置の問題があろう<sup>2</sup>。これはある点でイタリア人文主義を特徴づける「キケロ主義」とも関わってくる<sup>3</sup>。文献批判と異教文化の視点からは、15世紀の人文主義者 (ヒューマニスト [英]・ユマニスト [仏]・フマニスト [独]・ウマニスタ [伊]) ロレンツォ・ヴァッラ (Lorenzo Valla) の名が必ず挙がり、エラスムスにおける聖書解釈やエピクロス主義との関連が問題となる。それは、16世紀北方の宗教改革の精神的、思想的背景となる一方で、ルネサンスを特徴づける異教主義となり、大いにキリスト教精神と衝突する<sup>4</sup>。宗教改革者たちについては欧米の研究は

<sup>1</sup> Achille Olivieri, *Presentazione in Erasmo, Venezia e la cultura padana nel '500*, Atti del XIX convegno internazionale di studi storici, Rovigo, Palazzo Roncale, 8-9 maggio 1993, a cura di Achille Olivieri, Staghella 1995, 5-8, 特に5.

<sup>2</sup> このテーマ設定自体は珍しくはないが、第2次世界大戦後間もない出版という点で次の書は注目されよう。Arndt Schreiber, *Petrarca und Erasmus. Der Humanismus in Italien und in Norden*, Heidelberg 1947. これは1946年ハイデルベルク大学夏季期の講義に基づく。無論、前後して出た次の書に較べると、学術的価値は乏しいだろうが、注目すべき言い回しがあり、本文で引用する。Walter Rüegg, *Cicero und der Humanismus. Formale Untersuchungen über Petrarca und Erasmus*, Zürich 1946.

<sup>3</sup> Cfr. Luca d' Ascia, *Erasmo e l'umanesimo romano*, Firenze 1991.

<sup>4</sup> Cfr. Siro Attilio Nulli, *Erasmo e il Rinascimento*, Torino 1955, 285-384.

多く、また邦語文献も少なくはない<sup>5</sup>。

この方面ではドイツ語圏が注視されるなか、ここではフランスに敢えて言及したい。オギュスタン・ルノーデ (Augustin Renaudet) が描いた「プレレフォルム」(Préréforme) とユマニスムの関係、これにエラスムスやルフェーヴル・デタープル (Lefèvre d'Étaples) がどのように関わって行くのかが問題となろう<sup>6</sup>。シャルル8世が敢行した1494年のイタリア遠征以来、その後、ルイ12世、フランソワ1世の2代に渡って同遠征は繰り返された。これは文化流入にも繋がり、パリを中心にイタリア人文主義やプラトン主義の影響を受けることとなる。改革前夜とその後の思想上の展開は、やがて当地でイエズス会が結成されることもあり、この状況を見極めておくことは意義深いことであろう<sup>7</sup>。

当然パリ大学のスコラ神学が俎上に上る。これに、イタリア・ルネサンス文化に影響されたエラスムスやルフェーヴル・デタープルらが如何に向き合ったのか。神学を専攻しなかったルフェーヴル・デタープルは当地の神学者と対立し、また後のフランシスコ・ザビエル (Francisco Xavier) はここで神学を長く学んだが、学位を取ることはなく、新たなカトリック改革に向かうことになる。近年では「神学者」エラスムスの像が打ち出され、改めて広義のクリスチャン・ヒューマニズム問題が浮上した<sup>8</sup>。エラスムスはスコラ学の牙城パリと反りが合わず、1506年トリノ大学で神学博士号を取った人とは言え<sup>9</sup>、彼と神学者ルターの対決となると、彼は必ずしも専門ではない「神学」で対峙を迫られたのではないか。エラスムス批判はプロテスタント側だけでなく、カトリック側にも数多く見出され、アルベルト・ピーオ (Alberto Pio) やアゴステイーノ・ステウコ (Agostino Steuco) の著述はこの中に数えられる<sup>10</sup>。スコラ神学批判に対してはエラスムスと「中世思想」の関係を、ローマ教会からの逸脱批判に対してはエラスムスの「宗教思想」の実態を、ともに広く追究し、丁寧に検討することが重要であろう<sup>11</sup>。

イタリアとアルプス以北間の教会改革や福音をめぐる宗教上、神学上の問題は、後述

<sup>5</sup> その代表は金子晴勇であろうし、また翻訳の業績も多い。『宗教改革著作集2 エラスムス』教文館、1989年。この翻訳に名を連ねている木ノ脇悦郎もまたエラスムスに関する専門書がある。また木ノ脇に関しては、本文参照。

<sup>6</sup> Augustin Renaudet, *Préréforme et Humanisme à Paris pendant les premières guerres d'Italie (1494-1517)*, 1953 (1916). Margaret Mann, *Érasme et les débuts de la Réforme française (1517-1536)*, Paris 1934. マーガレット・マンは謝意のなかでP.S. Allenの死去に言及している。他方で、この時代の錚々たるエラスムスに通じた学者の名を挙げて感謝している。そのなかにもAugustin RenaudetらとともにNesca Adeline Robbがいる。後年、Margaret Mann Phillipsとして彼女は、*The 'Adages' of Erasmus. A Study with Translations*, Cambridge 1964をこのロップに捧げた。アレンに関しては本文参照。

<sup>7</sup> Cfr. 根占献一「若きザビエルとルネサンス」、『ソフィア』第216号、2005年冬季、第54巻第4号、10-15 (424-429) 頁。  
<sup>8</sup> 註37、47の文献参照。

<sup>9</sup> *Erasmus, Venezia e la cultura padana nel '500*, 11n.6に文献が各種挙がっている。

<sup>10</sup> ピーオとエラスムスとの関係はMyron P. Gilmoreの幾つかの論考によって明らかにされている。これに関しては、註13のシルヴァーナ・セイデル (ザイデル)・メンキの著書本文及び参考文献参照。ステウコについては、セイデル・メンキとともに特にRonald Keith Delph, *Italian Humanism in the Early Reformation: Agostino Steuco (1497-1548)*, the University of Michigan, Ph.D. 1987, 2 vols. ピーオやステウコと違い、イタリア出身者アンドレア・アンモニオとエラスムスの睦まじい交遊を描くのはClemente Pizzi, *Un Amico di Erasmo. L'umanista Andrea Ammonio*, Firenze 1956.

<sup>11</sup> 彼と中世思想の関係や彼の中世観を検討した新しい書に István Bejczy, *Erasmus and the Middle Ages. The*

するデリオ・カンティモーリ (Delio Cantimori) の異端研究などが基本となって進展している。そのなかで注目される研究者は、彼の弟子シルヴァーナ・セイデル (ザイデル)・メンキ (Silvana Seidel Menchi) であろう。セイデル・メンキの仕事は年とともに増えているが、最初はルターの手紙がどのようにイタリアに入ってきたのか、翻訳文献の探査が彼女の基本的仕事であった。これは、彼女の研究が目指していたイタリアとエラスムスとの関連からなされ<sup>12</sup>、やがて主著となる力作が生まれるに至った<sup>13</sup>。イタリアとエラスムスの全般的な関係ならば、それまでもドゥ・ノラック (de Nolhac) やルノーデらによってなされてきたが<sup>14</sup>、視点を異にする、イタリアにおける異端者としてのエラスムス観は、カンティモーリ以後、今や新たな段階に達したのである。北方の二巨星エラスムスとルターがどのように受容されたかは、イタリアのスピリトゥアーリ (spirituali 霊的人々) やカトリック側の反応を知る上で必須である<sup>15</sup>。

冒頭で述べたように、エラスムスに関わる文献は膨大な数に上る。彼自身、書き物「工房」(officina) から書籍が生まれることを楽しみにしていたし、他者の物もまた喜び、これを祝した<sup>16</sup>。生前彼は、版を重ねる書物を次々に印刷出版したことは余りにも有名だが、その死後にも、18世紀初頭の大部なライデン (レイデン) 版10巻<sup>17</sup>、20世紀にはこの版に入らなかったものを多く収めたファーガソン (Ferguson) 編の単著<sup>18</sup>や、エラスムスの三著作各版を取めたホルボーン (Holborn) 編の単著としての版<sup>19</sup>がある。さらに全集としては1969年からの新たなアムステルダム版全集 (*Opera Omnia*, Amsterdam, North Holland Publishing Company)、今も続くトロント大学英語版エラスムス著作集成 (*Collected Works of Erasmus*) などがある。

---

*Historical Consciousness of a Christian Humanist*, Leiden/Boston/ Köln, 2001. 宗教思想全般を追究する書はJ.-B. Pineau, *Érasme, sa pensée religieuse*. Thèse présentée à la Faculté des Lettres de l'Université de Paris, Paris 1923.

<sup>12</sup> Silvana Seidel Menchi, Le traduzioni italiane di Lutero nella prima metà del Cinquecento, in *Rinascimento* 27 (1977), 31-108.

<sup>13</sup> Ead., *Erasmus in Italia 1520-1580*, Torino 1987. ドイツ語訳版はカンティモーリの思い出に捧げられている。仏訳も存在するようだが、未確認。Ead., *Erasmus als Ketzer Reformation und Inquisition im Italien des 16. Jahrhunderts*, Leiden/New York/Köln, 1993.

<sup>14</sup> Ead., *Erasmus*, 25-6, Ead., *Erasmus*, 17-8で先行研究に言及し、自作との違いを述べている。ルノーデについてはさらに次註参照。

<sup>15</sup> ルノーデのエラスムス観には、カトリックでもプロテスタントでもない「第三の教会」構想という問題がある。これに関してはLouis Bouyer, *Erasmus and his Times*, translated by Francis X. Murphy, Westminster Maryland, 1959の主張と反論参照。

<sup>16</sup> *Opus Epistolarum Desiderii Erasmi*, t. VI 1525-1527, Oxonii 1926, 158. Achille Olivieri, *op.cit.*, 5の引用による。このエラスムス書簡集に関しては註20参照。

<sup>17</sup> *Desiderii Erasmi Opera Omnia in decem tomos distincta*, Lugdumi Batavorum, 1703-06 (Georg Olms, Hildesheim 1961). 編者はJohannes Clericus (Jean Leclerc [Le Clerc]) である。ルクレールについてはCornelis Reedijk, The Leiden Edition of Erasmus' *Opera omnia* in a European Context, in *Erasmus und Europa*. Vorträge hrsg. von August Buck, Wiesbaden 1988, 163-82.

<sup>18</sup> *Erasmi Opuscula. A Supplement to the Opera Omnia*, ed. by W.K.Ferguson, La Haye 1978 (1933).

<sup>19</sup> *Desiderius Erasmus Roterodamus. Ausgewählte Werke*, in Gemeinschaft mit Annemarie Holborn hrsg. von Hajo Holborn, München 1964 (1933).

ルネサンス文学・思想研究の一つの鍵は書簡文学が握っている。特にエラスムスの場合、アレン（後述）による書簡全集<sup>20</sup>の金字塔が建っている。3100通を超える書簡で、政治や学問などの分野を問わず、当代の各国の指導者層と意見の交換を行ない、常に話題の中心に居たのが彼であった。個々の著作の校訂版、そして彼自身の著述の古今の各国語訳版などを、これらの上に加えると莫大な数に上り、まさに巨人として聳えるエラスムスが現在も眼前にいる。こうして彼と彼に関わる著作に取り組むこと自体が、あたかも「ヘラクレス的功業」<sup>21</sup>のようになることはまちがいない。

ホルボーンの編書に関して少し説明を加えたい。彼による案内（Einleitung）はまさに導入としてエラスムス像に的確に至らしめる文となっているが<sup>22</sup>、編著自体はハンス・フォン・シューベルト（Hans von Schubert 1859-1931）の思い出に献呈されている。シューベルトの名を初めて意識したのは、このドイツ福音派の神学者・歴史家が出版したパウル・メストヴェルト（Paul Mestwerdt）の作<sup>23</sup>を知った時である。若くして、1914年フランスの戦場に倒れたメストヴェルトは、青年エラスムスの知的、宗教的形成にデヴォティオ・モデルナ（devotio moderna 近代的敬虔）とイタリア・ルネサンス文化、すなわちフマニスムスとプラトニスムスの協働を見た。その後、これらの研究は非常に進み、デヴォティオ・モデルナとエラスムスの関係如何には否定的側面もある<sup>24</sup>。この点では彼の解釈には問題があるにしても、イタリアとエラスムスとの関係は必ずしもそうはなっていない。早くに、ランベルト・ボルギ（Lamberto Borghi）はメストヴェルトが強調したデヴォティオ・モデルナとの関連は強く否定したが、イタリアのヒューマニズムやプラトニズムからの影響は彼よりさらに積極的に評価した<sup>25</sup>。この視点はその後も変わらず、研究の課題と方向が維持されていると言えよう。

## （二）論集に見る諸研究

一般論として、生誕と没年後に関した、区切りのよい年に纏わる論集には、特にその時の研究の状況と関心事を教えるところがある<sup>26</sup>。先に、1936年にエラスムスと縁が深いバーゼルえにしで出た、エラスムスの没後400年忌論集を見てみよう。

<sup>20</sup> P.S. Allen, *Opus Epistolarum Desiderii Erasmi*, I-XI, Oxonii (Oxford), 1906-47.

<sup>21</sup> Cfr. Hilmar M. Pabel, *Herculean Labours. Erasmus and the Editing of St. Jerome's Letters in the Renaissance*, Leiden/Boston, 2008.

<sup>22</sup> *Desiderius Erasmus Roterodamus. Ausgewählte Werke*, IX-XXIV.

<sup>23</sup> Paul Mestwerdt, *Die Anfänge des Erasmus. Humanismus und „Devotio moderna“*, mit einer Lebensskizze von C.H. Becker, hrsg. von Hans von Schubert, Leipzig 1917

<sup>24</sup> Cfr. R.R. Post, *The Modern Devotion. Confrontation with Reformation and Humanism*, Leiden 1968.

<sup>25</sup> Lamberto Borghi, *Umanesimo e concezione religiosa in Erasmo di Rotterdam*, Firenze 1935.

<sup>26</sup> 折に触れてエラスムスに言及するルネサンス文学者渡辺一夫には、生誕・没後記念に関わる発言もまた見出される。『渡辺一夫著作集4 ルネサンス雑考 中巻』筑摩書房、1977年増補版第1刷、25、39頁。

## 年忌論集

序言 (Geleitwort) を書いたエドゥアルト・ヒス (Eduard His) の他、別の19人による論文が掲載されている<sup>27</sup>。このうちバーゼル関係者が序言執筆者を含めて12名に上っている。ドイツ語論文が序言を加えると15本、イタリア語論文が2本、英語、フランス語、ラテン語各1本となっている。ドイツ語論文のなかにはライデン大学のヨハン・ホイジンガ (Johan Huizinga) のものが含まれる。題名はラテン語だが、本文はドイツ語というのものもある。ラテン語による論文執筆者はヒューマニズム研究で知られるハンガリーの学者ラディスラウス・ユフダス (Ladislaus Juhdaz) である。

イタリア語論文は、ベネデット・クローチェ (Benedetto Croce) とデリオ・カンティモーリが筆者である。この時クローチェはイタリア王国の上院議員であった。名前に閣下 (eccellenza) がついている。カンティモーリは学士 (dottore) とあってローマとあるので、ドイツ研究に関わるイタリア研究所 (Istituto italiano di studi germanici) に身があったときのこととなる。これは、ファシスト政権下で文部大臣を務めた哲学者ジョヴァンニ・ジェンティーレ (Giovanni Gentile) の力による。20年代から30年代を経て40年代前半まで、研究・出版機関などの多くの要職を兼ねていたのがジェンティーレであった。かつての友クローチェとは袂を分かつことになる。ジェンティーレによりカンティモーリは研究者としての能力を高く評価され、後にピサの高等研究所 (Scuola normale superiore di Pisa) に招かれる<sup>28</sup>。

特に異端研究で名を挙げるカンティモーリは、エラスムスの影響が異端者にも強く及んでいることを示している。主著『1500年代のイタリアの異端者たち—歴史的研究』(*Eretici italiani del Cinquecento. Ricerche storiche*, Firenze 1939)が、ヴェルナー・ケーギ (Werner Kaegi) によるドイツ語訳『後期ルネサンスのイタリアの異端者たち』で出たのはバーゼルにおいてであった。序言冒頭にジェンティーレの名前が出る。バーゼル大学のケーギによると、40年代初めには訳文ができていたようだが、出版が遅れたのである<sup>29</sup>。ケーギは没後400年の論集に「18世紀のエラスムス」を発表している文化史家である。エラスムス思想は同時代への影響のみならず、18世紀の啓蒙主義との関連が深く、関係者や出版状況、宗教動向を含めてこの論考から多々啓発される<sup>30</sup>。またその思想は所謂啓蒙主義に限

<sup>27</sup> *Gedenkschrift zum 400. Todestage des Erasmus von Rotterdam*, hrsg. von der historischen und Antiquarischen Gesellschaft zu Basel, Basel 1936.

<sup>28</sup> Giovanni Miccoli, *Delio Cantimori. La ricerca di una nuova critica storiografica, In appendice, l'elenco dei corsi e dei seminari e la bibliografia degli scritti*, Torino 1970, 340. また次の論文は興味深いこと、この上ない。John Tedeschi, The Early Research Travels of Delio Cantimori, in *Ritratti, La dimensione individuale nella storia (secoli XV-XX)*. *Studi in onore di Anne Jacobson Schutte*, a cura di R.A. Pierce e S.S. Menchi, Roma 2009, 283-320.

<sup>29</sup> Delio Cantimori, *Italianische Haeretiker der Spätrenaissance*, Basel 1949, V-IX.

<sup>30</sup> Werner Kaegi, Erasmus in Achtzehnten Jahrhundert, in *Gedenkschrift zum 400. Todestage des Erasmus von Rotterdam*, 205-227. Cfr. F.Schalk, Von Erasmus' res publica literaria zur Gelehrtenrepublik der Aufklärung, in Id., *Studien zur französischen Aufklärung*, Frankfurt a.M. 1977.



らず、宗教上の自由思想とも関わることも重要であり、双方はヴィルヘルム・ディルタイ (Wilhelm Dilthey) とエルンスト・トレルチ (Ernst Troeltsch) により示されていた<sup>31</sup>。

英語論文は、エラスムス書簡集の編者として高名なパーシィ・スタッフォード・アレ (Percy Stafford Allen) であるが、この年にはすでに死去 (1933年) していたため、未亡人ヘレン・メアリ・アレ (Helen Mary Allen) の短文が冒頭に挙がっている。彼女は近代日本の忘れ難い英国人アーネスト・メイソン・サトウ (Ernest Mason Satow) の姪に当たる。寄稿者のなかには、のちに古典学史に関わる基本文献を著わすルドルフ・プファイファー (Rudolf Pfeiffer) がいる。妻がユダヤ人であったため、400年忌論集出版1、2年後には英国で教えることになる。この論集に彼が書いたのは、エラスムスの『反蛮族論』 (*Antibarbari*) であった<sup>32</sup>。『反蛮族論』はエラスムスの若い時の作品 (1494年頃) であるが、公刊されたのは生前とは言え、かなり後年になってからである。プファイファーは生涯このエラスムス作品に関心をいただき、ここにヒューマニスト・エラスムスの原点を見ている<sup>33</sup>。

目下、プファイファーの生涯を詳らかにできるほどの資料を集めていないが、珠玉の短編『フマニタス・エラスミアーナ』<sup>34</sup>は、ヴァールブルク蔵書叢書として公刊された。彼は若いころ、出来たばかりのハンブルク大学で教えていたことがあり、この時にアビ・ヴァールブルク (Aby Warburg) の関係者と繋がりができたのであろう。同論文には、同大学やヴァールブルクと結びつきが深い、エルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer) の『ルネサンス哲学における個と宇宙』<sup>35</sup>からの引用が見られる。それは、エラスムスとプロメテウス神話の関係を論じる箇所においてである。

以上、纏まった形での年忌論集は管見の限り、バーゼルで出た一冊だけであり、次に述べる生誕記念論集数に較べると衆寡敵せずだが、中身には面白い顔ぶれが揃っているとも言えよう。なお、形式を問わなければ、1936年は単独の学術誌に多くのエラスムス関連の論文が出ていることを補足しておきたい。

## 生誕記念論集

エラスムスの生年は必ずしもはっきりしないが、1466年から69年の間と目されてい

<sup>31</sup> Cfr. Andreas Flitner, *Erasmus im Urteil seiner Nachwelt. Das literarische Erasmus-Bild von Beatus Rhenanus bis zu Jean LeClerec*, Tübingen 1952. フリットナーはケーギからの研究への励ましに謝意を表している。

<sup>32</sup> Rudolf Pfeiffer, Die Wandlungen der <<Antibarbari>>, in *Gedenkschrift*, 50-68. これは次の書にも収録されている。Id., *Ausgewählte Schriften. Aufsätze und Vorträge zur griechischen Dichtung und zum Humanismus*, München 1960, 188-207.

<sup>33</sup> Id., *Schriften*. 邦語論文では、柳沼正広「エラスムスの古典研究擁護におけるヒエロニムスとアウグスティヌスの引用について—『反蛮族論』 *Antibarbarorum liber*から」、『創価大学人文論集』第16号 (2004年)。

<sup>34</sup> Pfeiffer., *Humanitas erasmiana*, Studien der Bibliothek Warburg, hrsg. von Fritz Saxl, XXII, Leipzig/Berlin 1931. Vorwortから、主題追究から出版に至るまで年数がいささか闊したことが分かる。

<sup>35</sup> Ernst Cassirer, *Individuum und Kosmos in der Philosophie der Renaissance*, Leipzig/Berlin 1927. これは Studien der Bibliothek Warburg, Heft 10に相当する。Pfeiffer, *op. cit.*, 15.

る<sup>36</sup>。このため1970年を含めて生誕500年記念関連の論集が1960年代後半に出た。いずれもフランス語での発表が中心となっている。この点で先に見た没後400年忌とは違っている。本覚え書の趣旨に従い、それぞれを簡単に紹介しよう。

(I)

*Colloquium erasmianum. Actes du Colloque International réuni à Mons du 26 au 29 octobre 1967 à l'occasion du cinquième centenaire de la naissance d'Érasme, Mons 1968.*

エラスムス生誕に基づく国際集会開催年が最も古く、すべてがフランス語論文、総頁数およそ350である。エラスムス神学の解釈に専門書を著わしたエルンスト＝ヴィルヘルム・コールズ (Ernst-Wilhelm Kohls) も、ここではフランス語 (翻訳) となって、自由意志を論じている<sup>37</sup>。同時期にアウグスティヌスのエラスムスへの影響を論じた専門書を出しているシャルル・ベネ (Charles Béné) と、10数年後にオリゲネスを愛読するエラスムスについて論じる専門書を公刊するアンドレ・ゴダン (André Godin) などの名が見出される<sup>38</sup>。エピクロス＝ヴァッラ＝エラスムスの線をめぐるキリスト教的エピクロス主義の論考は共同執筆となっている<sup>39</sup>。このあと紹介する書物同様に、幾度となく顔を出すマルセル・バタイヨン (Marcel Bataillon) とジャン＝クロード・マルゴラン (Jean-Claude Margolin) の名前がある。

(II)

*Actes du congrès Érasme, organisé par la Municipalité de Rotterdam sous les auspices de l'Académie Royale Néerlandaise des Sciences et des Sciences Humaines. Rotterdam 27-29 octobre 1969, Amsterdam/Londres 1971.*

セム・ドレンスデン (Sem Dresden) がエラスムスの紹介を行う。全体はこれを含んで、フランス語7本、ドイツ語4本、英語2本の論考から成る。英語の一作は有名なクレイグ・R・トンプソン (Craig R. Thompson) の手になる<sup>40</sup>。ロマンス語学者として知られるフリッツ・シャルク (Fritz Schalk) がアカデミーを含む「文芸共和国」を論じている<sup>41</sup>。また同じくドイツ語でカジミエルス・クマニエキ (Kazimierz Kumaniecki) が『反蛮族論』

<sup>36</sup> John B. Gleason, The Birth Dates of John Colet and Erasmus of Rotterdam: Fresh Documentary Evidence, in *Renaissance Quarterly* XXXII (1979), 73-6. 1466年10月28日説を主張した。

<sup>37</sup> Ernst-Wilhelm Kohls, La position théologique d'Érasme et la tradition dans le <<De libero arbitrio>>, 69-88. 専門書はId., *Die Theologie des Erasmus*, Basel 1966, 2Bde. Vorwortでコールズはエラスムス生誕500年に関して、やはり生まれを1466年10月28日としている。

<sup>38</sup> 彼らの主著は以下の通りである。Charles Béné, *Érasme et Saint Augustin ou Influence de Saint Augustin sur l'humanisme d'Érasme*, Genève 1969. André Godin, *Érasme lecteur d'Origène*, Genève 1982.

<sup>39</sup> Marie Delcourt et Marcelle Derwa, Trois aspects humanistes de l'Épicurisme chrétien, 119-33.

<sup>40</sup> Craig R. Thompson, Erasmus and Tudor England, 29-68.

<sup>41</sup> Fritz Schalk, Erasmus und *res publica literaria*, 14-28

で書いている<sup>42</sup>。マルシリオ・フィチーノ (Marsilio Ficino) の専門家であるレイモン・マルセル (Raymond Marcel) がエラスムスとイタリアの関係をとり上げている<sup>43</sup>。マルセル師はこの主題に関心が深く、他の学術誌や専門書に幾つか論考を発表していることを付け加えておきたい。

(III)

*Scrinium erasmianum*. Mélanges historiques publiés sous le patronage de l'université de Louvain à l'occasion du cinquième centenaire de la naissance d'Érasme, Leiden 1969, 2 vol.

ルーヴァン大学の J・コパン (Coppens) の編集になり、コパン自身、あとの巻に論文を執筆している。最初の巻にある序言冒頭で、彼はエラスムス生誕以来、「私たちの国がこれほど壮観にこれほど一致して彼に栄誉を授けたことはかつてなかった」とし、註のなかで1969年の出版の数々に触れている。また、「ルーヴァンの町はエラスムスが長い滞在をしたネーデルランドの唯一の都市 (la seule ville des Pays-Bas)」といい、註で、それは1502年から1504年、1517年7月から1521年10月としている。続けて本文で、「エラスムスがパルク修道院でヴァッラの新約聖書に関する註釈を発見したところ」とも記している。この序言に続く最初の論文は M・ナウヴェラルツ (Nauwelaerts) の「ルーヴァンにおけるエラスムス」であり、特に1517年以降を追っている<sup>44</sup>。

各巻は頁番号が通しになっておらず、全体で1200頁に迫る大作であり、充実した内容を保持している。うち最初の巻は450頁余りである。あとの巻は文献目録や全体のインデキスの関係で頁が増えている。英語、フランス語、オランダ語、そしてドイツ語の論文があるなか、最初の巻にラテン語論文もあり、目を惹く。筆者は著名な J・エイズヴェイン (Ijsewijn) である<sup>45</sup>。他にも、同巻には興味深い論考があるが、第2巻にはビュルトオ (Bultot) のエピクロス主義やドレスデンのフマニタス概念をめぐる論考が収められている<sup>46</sup>。ここでは後者はあとで本論のなかで触れたい。エラスムス神学の解明に成果を挙げた コールズとジョン・B・ペイン (John B. Payne)<sup>47</sup>は両巻に分かれて執筆している。

<sup>42</sup> Kazimierz Kumaniecki, Erasmus' *Antibarbari*, 116-35. クマニエキはアムステルダム版エラスムス全集 (AMS1-1) に校訂版を発表している。この全集に関しては本論 (一) を参照。

<sup>43</sup> Raymond Marcel, Les dettes d'Érasme envers l'Italie, 159-173.

<sup>44</sup> M. Nauwelaerts, Érasme a Louvain. Ephémérides d'un séjour de 1517 a 1521. 3-24.

<sup>45</sup> J. Ijsewijn, Erasmus ex poeta theologus sive de litterarum instauratarum apud Hollandos incunabulis, 375-89.

<sup>46</sup> R. Bultot, Érasme, Épicure et le <<de contemptu mundi>>, II, 205-38. S. Dresden, Érasme et la notion de *Humanitas*, II, 527-45. 本文中に既出のドレスデンに関しては、次の大事な訳書がある。『ルネサンス精神史』高田勇訳、平凡社、1970年。随所に彼の炯眼が光る。特に「フマニタス」に関しては、同書、245-46頁。

<sup>47</sup> ペインの主著は John B. Payne, *Erasmus: His Theology of the Sacraments*, 1970. コールズについては註37参照。



(IV)

*Colloquia erasmiana turonensia*, Tour, 3-25 juillet 1969, Paris 1972. 2 vol.

コルズも書いているが、すべてフラン語論文で2巻から成る。頁は通し番号で、最後の数字は973頁である。第1巻にはバタイオン、ドレスデンと言ったお馴染の研究者以外に、テーマとしてはエラスムスとイタリア、エラスムスとキケロ、エラスムスとペトラルカが現われる。マーガレット・マン・フィリップス (Margaret Mann Phillips) が2部に分かれて、M・A・スクリーチ (Screech)、H・ブラバント (Brabant) たちが2本続けて執筆している。他にも複数書いている人がいるのが本書の特徴であろう。それは第2巻となると、ドレスデン、マルカドゥール (Marc'Hadour) が2本、ゴダンが2本、うち1本はエラスムスとオリゲネスである。さらにコパン、H・メイラン (Meylan) たちが2本となっている。この巻には主題としては、エラスムスとイタリア、エラスムスとキケロ、エラスムスとレオ10世などがあり、またマルセル、M・P・ギルモア (Gilmore) も執筆している。無論、バタイオン、マルゴランも顔を見せている。またイタリアの研究者も見られる。魔術思想が専門のP・ザンベッリ (Zambelli)、人文主義研究のG・ヴァッレーゼ (Vallese) (2本) らである。ギルモアはヴィッラ・イ・タッティ (Villa I Tatti フィレンツェ) のハーヴァード大学ルネサンス研究所の所長時代である。

最後にこの (IV) では特にひとつの論文に注目したい。それはA・ジェルロ (Gerlo) の「書簡作成」である<sup>48</sup>。これはエラスムスの作品そのものの題名でもある。ジェルロもまた、このあとの巻にも執筆しているのだが、ここでは最初の巻にある論文である。すでに述べたように、書簡文学はルネサンス文化の特徴でもあり、彼はここではそれ以前の、古い時代の歴史から書き起こし、ユストゥス・リプシウスの時代にまで及んでいる。ジェルロには『エラスムスとその肖像画家たち』<sup>49</sup>という書物があるにしても、私の認識では彼はこの分野の専門家として、他の論文もまた知られている<sup>50</sup>。「キリシタンの世紀」の日本に関して、通辞ジョアン・ロドリゲスをこの書簡術から解釈する研究書があることは、研究の視点が共通していて興が湧く<sup>51</sup>。

以上のすべてにおいて頻繁に名が出るのは、マルセル・バタイオンであり、5本に上る。(I) では開会の辞、(II) ではエラスムス『痴愚神礼賛』(*Moriae encomium*) のスペインへの影響を論じ、彼の得意分野と関わる。(III) ではアンドレ・デ・レセンデ (André

<sup>48</sup> Aloïs Gerlo, *L'Opus de conscribendis epistolis*, I, 223-232. 類似の論文にId., *The Opus de conscribendis epistolis of Erasmus and the Tradition of the ars epistolica*, in *Classical Influences on the European Culture A.D. 500-1500*, ed. by R.R. Bolgar, Cambridge, 1971, 103-14

<sup>49</sup> Id., *Érasme et ses portraitists. Metsijs-Dürer-Holbein*, Nieuwkoop 1969 (1950). 邦語文献に、梅津忠雄『肖像画のイコノロジー—エラスムスの肖像の研究』多賀出版、1987年。

<sup>50</sup> Gerlo, Erasmus von Rotterdam: Sein Selbstporträt in seinen Briefen, in *Der Brief im Zeitalter der Renaissance*, hrsg. von Franz Josef Worstbrock, Weinheim 1983, 7-24.

<sup>51</sup> Jeroen Pieter Lamers, *Treatise on Epistolary Style. Joān Rodoriguez on the Noble Art of Writing Japanese Letters*, Center for Japanese Studies, The University of Michigan, 2002. この書を教示していただいた榎本恵美子氏にはお礼を申し上げます。

de Resende) のファン・ルイス・ビベス (Juan Luis Vives) 挿絵を扱い、あとの巻ではエラスムスの肖像画を簡単に論じている。最後の書 (IV) では、締めくくりとしてエラスムスの現在の関心を論じている。

次に引けを取らないのはマルゴランであろうか。(I) では大会の挨拶とエラスムスの読者ギュイ・パタン (Guy Patin)、(II) では『キリスト教徒兵士エンキリディオ』 (*Enchiridion militis christiani*)<sup>52</sup>、(III) ではエラスムス『新約聖書』 (*Novum Instrumentum*) の読者ヨハネス・ア・ラスコ (Johannes à Lasco ジャン・ラスキ Jean Laski)、(IV) ではエラスムスと真理などとなっている。リベルタンのギュイ・パタンに関わる論文ではリプシウス (Lipsius) の名が散見され、近代思想に及ぼした新ストア主義思想の問題を考えさせられる<sup>53</sup>。これはディルタイが重視した近代ヨーロッパ文化の観点であり、自由思想とも関わる。蔵書家ガブリエル・ノデ (Gabriel Naudé) はこの意味で私自身関心を持っている人物で、文脈上、言及があつて有難い。

この他、パタイヨンやマルゴランに劣らない研究者は広く見られ、またシャルクのように狭義にエラスムスの専門家とは言えない者も交じってはいるが、ここでは割愛したい。ある意味でこのような記念の年に巡り合えた学者がかなりいるとの証左でもあろう。

### その他の論集

他方、年度をこのような意味ある年に限定しないのであれば、管見の限り他に2冊の論集が浮かんでくるので、こちらも同様に簡単に紹介したい。ひとつはアウグスト・ブック (August Buck) 編の『エラスムスとヨーロッパ』である<sup>54</sup>。このなかにはマルゴランの名もあるが、先に見た論集にも名前が出ているオットー・ヘルディング (Otto Herding)、レオン・E・アルカン (Léon-E. Halkin) などが寄稿している。コルネリス・レーダイク (Cornelis Reedijk) についてはライデン版のところで引用した<sup>55</sup>。アウグスト・ブックはこのような論集の仕事を多くした研究者だが、ここでも短いながら、適切な導入 (Einleitung) を行なっている。

もう一点は『エラスムス、ヴェネツィア、そして1500年代のポー側流域文化 (la cultura padana)』である<sup>56</sup>。これまたマルゴランの名前がある。彼はこの論集の巻頭に執筆し、エラスムスとイタリアの関係について、特にヴェネツィア文化との視点から新たな文献を加えたことになる<sup>57</sup>。開催地がイタリアであるので、内外のルネサンスの専

<sup>52</sup> これは (IV)IIでマルセルも扱っている。

<sup>53</sup> 最近の研究にJan Papy, Neostoizismus und Humanismus. Lipsius' neue Lektüre von Seneca in der *Manuductio ad Stoicam philosophiam* (1604), in *Der Einfluss des Hellenismus auf die Philosophie der Frühen Neuzeit*, Wiesbaden 2005, 53-80.

<sup>54</sup> *Erasmus und Europa. Vorträge*, hrsg. von August Buck, Wiesbaden 1988.

<sup>55</sup> 註17参照。

<sup>56</sup> *Erasmus, Venezia e la cultura padana nel '500*, a cura di Achille Olivieri, Stanghella (Pd), 1995. 註1参照。

<sup>57</sup> Jean Claude Margolin, *Les Fêtes Vénitiennes d'Érasme. La cueillette des fruits mûrs, la préparation des*

門家が揃っている。たとえば、ポステルの専門家マリオン・レザー・クンツ (Marion Leathers Kuntz) がエラスムス思想との関係を扱っている<sup>58</sup>。エラスムスがイタリア、ヴェネツィアに滞在した1508年に的を絞ったジーノ・ベンゾーニ (Gino Benzoni) の論文も目を惹くが<sup>59</sup>、これよりもはるかに学術的な論文を書いているのはルーカ・ダァシヤ (Luca d' Ascia) である。エラスムスとチェリオ・セコンド・クウリオネ (Celio Secondo Curione) 間の思想関係とその相違を明らかにして刺激刺戟的である<sup>60</sup>。

### (三) 『痴愚神礼賛』と『天国から締め出されたローマ法王の話』—新旧訳の問題点

ラテン語作家であったエラスムス<sup>61</sup>が西欧近代の各国語訳されて、フランス語、ドイツ語、オランダ語、イタリア語などで読まれるようになった意義は決して小さくないことは当然である。日本語は言語学上まったくこれらすべてと異なるがゆえに、エラスムス邦訳の意義はさらに比較にならないくらい絶大である。以下に紹介する文献の訳者たちの業績は揺るがず、称えられて然るべきである。その上で彼我の文化差異もまた大きく隔たるために、訳者たちが余り意識しなかったかのではないかと思われる問題点もまた垣間見られる。敢えてこれを指摘し、広くヨーロッパ思想の精粹課題として検討したい。

邦訳題名『痴愚神礼賛』<sup>62</sup>で知られるエラスムスの一著作は高校の教科書にも出るくらいポピュラーであり、場合によっては高校生が読む、唯一のルネサンス人文主義者の文献である。私もこれは高校時代に読んだのが、最初である。また挿絵 (ホルバイン [Holbein] 作) が付いていて、これを見ているだけでも、エラスムスの揶揄嘲弄した対象が分かる気がした。ボッカッチョの『デカメロン』から始まった、好色、墮落した修道士、聖職者像はこの揶揄に集約される。そして彼らがスコラ学の達人であれば、その批

moissons nouvelles, in *ibid.*, 11-26. 大学のあるパドヴァ文化圏ではAldo Stella, *Influssi erasmiani sui riformatori radicali*, in *ibid.*, 87-96. 北伊ブレッツィヤは, Elisabetta Selmi, Emilio degli Emili (1480-1530), primo traduttore in volgare dell'《*Enchiridion militis Christiani*》, 167-191. こちらはなかなかの力作。

<sup>58</sup> Marion Leathers Kuntz, Guglielmo Postel e le idee erasmiane, in *ibid.*, 51-58.

<sup>59</sup> Gino Benzoni, Venezia 1508, in *ibid.*, 29-47. ジュスティニアニーニ、クイリーニなど、やがてカマルドリ修道士となる人物も出、時代の雰囲気を与えている。

<sup>60</sup> Luca d' Ascia, Celio Secondo Curione, erasmista o antierasmista?, in *ibid.*, 209-223. Cfr. Id., *Frontiere: Erasmo da Rotterdam, Celio Secondo Curione, Giordano Bruno*, Bologna 2003. ルーカ・ダァシヤの専門単著はさらに註3参照。

<sup>61</sup> 臨終の床にあったエラスムスは、初めは相変わらずラテン語 *Miserere mihi* であったが、次にオランダ語 *Liefste Godt* と呟いた。これに関しては, Roland H. Bainton, *Man, God, and the Church in the Age of the Renaissance, in the Renaissance. Six Essays*, New York 1962 (1953), 77-96, 特に95. このバイントン論文には、カインと本文中に触れたプロメテウス神話への言及が見られるが、同じくR.H.バイントン『エラスムス』出村彰訳、日本基督教団出版局、1971年、75-6頁。

<sup>62</sup> 渡辺一夫訳 (1954年) 以外に2種類の邦訳が知られている。最古 (1940年) の『愚神禮讚』(池田薫訳) と最新 (2004年) の『痴愚神礼賛 附マルティヌス・ドルピウス書簡』(大出見訳) である。ここでは題名を渡辺訳から取ったのは、推測するに最も馴染みのある日本語題名となっているのではないかと、ということからである。大出は先行する翻訳がラテン語からの原典訳でないことを強調している。

判は二重に増す。エラスムスはルネサンスに生きていた先進的「ヒューマニスト」であったので、中世的な学問であるスコラ学と、これに裏打ちされたカトリック教会の教義を批判した。その態度はきわめて理性的で人間的であった。これが教科書的な説明であり、理解であろう。

また教科書には指摘されてはいなかったが、彼の思想的態度は、その後の啓蒙主義に小さからぬ影響を及ぼした。ルネサンスと18世紀ではキリスト教の位置付けは異なるにも拘わらず、エラスムスを啓蒙主義者あるいはその先駆者として捉え、彼のキリスト教に対する態度をあたかも合理主義者のように解釈する見方は、興味深い観点であるが、エラスムス精神を限定しているとも言える。つまり、『痴愚神礼賛』として知られる読み物への接し方は後世からの視点だけで良いのだろうかということである。ましてやそれが日本では彼の「主著」とされてき、エラスムスの全体を示しているとなれば、問題は大きい。主著とは何だろうか。特にエラスムスのように著作の種類が多い人の場合、何を以って主著とされるかは、研究関心が向かうところで主著が変わりうるのである。

ところで、この書物がいかに難しく、誤解、誤読を招きやすいかは、エラスムスの友人ゲラルドゥス・リストリウス (Gerardus Listrius) が同時代にあっても指摘したところであった<sup>63</sup>。『痴愚神礼賛』は1511年にパリで初版が出た後、通常は、1515年バーゼルのヨハネス・フローベン (Johannes Froben) による出版からはリストリウスの註釈書とともに世に出、その後長く影響を与え続けた<sup>64</sup>。『痴愚神礼賛』で批判されているのは聖職者や修道院関係者だけではなく、あらゆる社会層の人間が批判されているのであり、(スコラ) 学者もただその例外ではなかったことが往々に忘れ去られている。このような社会観は中世以来の有機体的社会観に基づくものであろう。各社会層に宛がわれた任務を損なっている者が批判されているのであって、当然の学者が批判されているわけではない<sup>65</sup>。

次に、『天国から締め出されたローマ法王の話』(木ノ協悦郎訳、新教出版社、2010年)に移りたい。これは幾つかの点で問題の書である。ファーガソン編の原題名 (*Dialogus, Iulius exclusus e coelis*) は対話編 (『対話。天国から排斥されしユリウス』) とあり、実際に対話形式を取っているにも拘らず、物語、話と邦題名になっている。対話形式は、

<sup>63</sup> Des. *Erasmii Rot. Moriae Encomium Cum Gerardi Listrii Commentariis*..., Eebo Editions, 2011. J. Austin Gavin and Thomas M. Walsh, *The Praise of Folly in Context: The Commentary of Girardus Listrius*, in *Renaissance Quarterly*, 24 (1971), 193-209.

<sup>64</sup> セバステイアン・フランクのドイツ語訳とともに考察する論文にGünter Hess, *Kommentarstruktur und Leser, Das „Lob der Torheit“ des Erasmus von Rotterdam, Kommentiert von Gerardus Listrius und Sebastian Frank*, in *Der Kommentar in der Renaissance*, hrsg. von August Buck und Otto Herding, Boppard 1975, 141-65. リストリウスとフランクについては *Contemporaries of Erasmus. A Bibliographical Register of the Renaissance and Reformation*. Editor: Peter G. Bietenholz, Associate Editor: Thomas B. Deutscher, Toronto/Buffalo/London 1995 (1985), 3 vols. の該当する項目に詳しい。

<sup>65</sup> Jean-Pierre Massaut, *Érasme, la Sorbonne et la nature de l'église*, in *Colloquium erasmianum*, Mons 1968, 89-116. 特に105. この論集に関しては本論 (二) 参照。

エラスムスの例がよく示しているようにルネサンス文学の領域で重要な表現手段となった。このことがこれでは伝わらない<sup>66</sup>。しかも元来のラテン語原文を、時に関西弁訳とする大胆さである。この当時のラテン語が所謂国際語であったのならば、ラテン語と日本語の間に何の対応関係がないからと言って、関西弁での訳出が望ましいということにはならないのではなからうか。訳者の考えの中には、これまた『痴愚神礼賛』的な構造がこの作品の戯画性ゆえにあったのであろうか。ここでは痴愚神が壇上に上がり、「話」をするべく弁じたてている。つまり「演説」(declamatio)しているわけではない。唯一の邦訳であるだけに惜しまれる。

また解説では、これがエラスムスの真作であることが確認されていると言わんばかりの筆致であるが、果してそうであろうか。エラスムスが『痴愚神礼賛』で歴史的人物は別にして生存中の人物の名誉のために実名を避けていること、またリストリウスもそのことを指摘していることを勘案すると、このような形で教皇ユリウス2世を批判したであろうかという素朴な疑問が生じる。文中から、ピサ公会議に見られるフランス寄りの姿勢が窺われるが、これはエラスムスの態度だろうか。偽作の疑いは、もちろん学術的にもカール・スタンゲ (Carl Stange) やペーター・ファービッシュ (Peter Fabisch) とともに残っているのではなからうか<sup>67</sup>。

#### (四) フマニタス問題

先のエラスムスの2作品は、形式的にも内容的にもルネサンス人文主義に関わっている。そしてエラスムスの時代に立ち返ってこの人文主義を考えようとしている以上、この時代にあった「フマニタス」や「フマニタス研究」の独自の用法に注視することは当然であろう<sup>68</sup>。これらに関してはすでに小著『共和国のプラトンの世界—イタリア・ルネサンス研究(続)』(創文社、2005年)中の第2章「市民社会におけるフマニタス概念」で扱い、また最近19世紀学学会招聘講演(新潟大学2013年1月12日)「ルネサンス・ヒューマニズムと近代—特にイタリアとドイツの視点から」でヨーロッパ精神史の問題として

<sup>66</sup> 最近、大川洋はエラスムスの別の論文に関して修辞学、レトリック上の見地から注意を促した。「エラスムスの『子ども教育について—教育論としての特色とその背景』」、「東京理科大学紀要(教育編)」第44号(2012年)。本文の『痴愚神礼賛』もまたレトリック作品である。これらはすべて「ヒューマニズム(人文主義)」に関わるために、なおざりにできない。

<sup>67</sup> Carl Stange, *Erasmus und Julius II. Eine Legende*, Berlin 1937. スタンゲは没後400年を意識して出版した。この書ではピノーの別の論文が指摘されているが、本論ではCfr. Pinau, *op.cit.*, 202. 真偽をめぐる問題には次の論文も役立つ。Ijsewijn, I rapporti tra Erasmo, l'umanesimo italiano, Roma e Giulio II, in *Erasmus, Venezia e la cultura padana*, 117-29. 不思議なことに、スタンゲに関してMansfield, *Interpretations C1920-2000. Erasmus in the Twentieth Century*, Toronto/Buffalo/London 2003には何も言及がない。マンズフィールドの研究書は有効であろうが、抜け落ちている著作や論文が少なからずある。のみならず評価を含めて視点が異なる場合も当然あり得る。Peter Fabisch, *Iulius Exclusus e Coelis. Motive und Tendenzen gallikanischer und bibelhumanistischer Papstkritik im Umfeld des Erasmus*, Münster 2008. これは老研究者による研鑽の賜となっている。

<sup>68</sup> Cfr. August Buck, *Die humanistische Tradition in der Romania*, Berlin/Zürich 1968, 133-50.



取り上げる機会があった<sup>69</sup>。フィチーノやドイツ近代の文学者や思想家にあってと同様、エラスムスにあってこの概念は劣らず大切であるだけでなく、思うに、彼はイタリア・ルネサンスと後世の時代を連結する役割をも果たしている。本論としては最後に、フマニタスに関わる重要な研究論文3点を提示しておきたい。そのうち最初の2点はすでに言及ないし注で触れているものであるが、最後のものはここが初出である。

I. R.Pfeiffer, *Humanitas erasmiana*, Studien der Bibliothek Warburg, hrsg. von Fritz Saxl, XXII, Leipzig/Berlin 1931.

II. S.Dresden, Érasme et la notion de *Humanitas*, in *Scrinium erasmianum*, Leiden 1969, II, 527-45.

III. Andrea Orsucci, Storie di parole. Controversie intorno al termine *humanitas* nella prima metà del Novecento (1907-1947), in *Rinascimento. Mito e concetto*, a cura di Renzo Ragghianti e Alessandro Savorelli, Pisa 2005, 255-90.

これらはいずれも読みごたえのある専門論文で、「フマニタス」概念の発展史や思想史的意味を考察している。この3点の論文作者のうち、古典文献学者はIのプファイファーだけであり、IIのドレスデンはルネサンス思想、IIIのアンドレア・オルスッチ（Andrea Orsucci）は近・現代哲学を専門とする。この専門性の相違もまた、彼らの論文に反映されているが、「フマニタス」問題にそれぞれから多くの教示を得ることは変わりがない。IよりもIIのほうがより広く思想史の領域を押えとともに、イタリアのルネサンス思想家との関連などを追究している。IIIは特に、リヒャルト・ライツェンシュタイン（Richard Reitzenstein）説から詳説し、プファイファー以前の研究をよく補っている。またフラン語圏の著名な古典文献学者ガストン・ボワシエ（Gaston Boissier）の紹介もあり、貴重である<sup>70</sup>。さらに「市民的ヒューマニズム」論に言及して、今日的論題を提供している。

以上のように、先行研究を概観してきたエラスムスはギリシャ・ローマの異教古典文学とキリスト教の教父文学に通じていた古典の大家として、また当時の知的、宗教的問題に通暁した時代の人として、その名声はヨーロッパを蓋うが、その影響はヨーロッパに限らない<sup>71</sup>。「地理上の発見」以後、世界の新旧の地と繋がっていたイベリア半島を考えて見ると、カトリック教会に批判的な人々、たとえば、ファン・デ・バルデス（Juan

<sup>69</sup> 講演も活字化される予定である。

<sup>70</sup> Orsucci, *Storie di parole*, 258n.9.

<sup>71</sup> Cf. Jacques Chomarar, *Grammaire et Rhetorique chez Érasme*, Paris 1981, 2 vols. ショマラのこの大作—大きく5部に分かれている。第1部と第4部には特に本文が始まる前にエラスムス理解に不可欠なことが指摘されていて重要である。頁は通し番号で最終頁は1249—はヨーロッパ域での表題通りの探究であり、本節に取り上げている「フマニタス」に主たる関心があるわけではない。結論のところできささか言及しているが、小論の関心とは異なっている。

de Valdés) やダミアン・デ・ゴイス (Damião de Gois) のみでなく<sup>72</sup>、バレンシアのコンベルソたるビベスやイエズス会の創始者イグナティウス・デ・ロヨラ (Ignatius de Loyola) への彼の影響も小さくはない<sup>73</sup>。またこの半島を越えて、新大陸にも及んでいる<sup>74</sup>。

思想上、間接的であれ、「キリシタンの世紀」の日本列島にすでにエラスムス思想が到達していたかどうかは、今後の研究課題として残されている。リーフデ号に乗って「貨狄尊者」エラスムスの像はこの地に到達していた<sup>75</sup>。問題はヒューマンイズムの核心、「フマニタス」が知られたかどうかであろう。アルント・シュライバー (Arndt Schreiber) の著書『ペトラルカとエラスムス—イタリアと北方のヒューマンイズム (フマニスムス)』 (*Petrarca und Erasmus. Der Humanismus in Italien und in Norden*) は本文最後の頁番号が41に過ぎない小冊であるものの、次の文で結ばれている。

Schwere Schicksale und Erschütterungen, Leiden und Beglückungen führen vom historischen Humanismus, dessen humanitas nur die eng abendländisch- christlich-römische war, zur einer die ganze Menschheit als Begriff und Realität ins Bewußtsein nehmenden neuen humanitas, der humanitas der Humanität<sup>76</sup>.

筆者の戦争体験が反映されている言だが、「フマニタス」の波及問題は、東西の出会いがあった、16世紀半ば以降の日本の「キリシタンの世紀」にも属する事柄でもある。像の到来・出現も面白いが、注目はエラスムス思想にも向かわなければならない。列島を縦断するコンベルソ自体も珍しくはない時代であり<sup>77</sup>、押し寄せる波にはこの時代の思いも伝わっていたことだろう。その思いには「フマニタス」が関わっていよう。精神史上、「フマニタス」が発展概念であるならば、「ヒューマンイズム」教育が拡大した地域には必ずやこれが見出されるに違いない<sup>78</sup>。これは東西交流史における今後の研究課題

<sup>72</sup> Edomondo Cione, *Juan de Valdés. La sua vita e il suo pensiero religioso. Seconda edizione riveduta ed aggiornata*, Napoli 1963. *Damião de Góis. Humaniste européen. Études présetées par José V. De Pina Martins*, Braga 1982.

<sup>73</sup> Inés Thürlmann, *Erasmus von Rotterdam und Joannes Ludovicus Vives als Pazifisten*, Freiburg (Schweiz), 1932, 93-4. テュルレマン (1905年生) は、自作の主題から最初の世界大戦期の教皇ベネディクトゥス15世 (在位1914-22) の和平行動に触れる。Ricardo Garcia-Villoslada, *Loyola y Erasmo. Dos Almas, dos Epocas*, Madrid 1965.

<sup>74</sup> Marcel Bataillon, *Érasme et l'Espagne. Recherches sur l'histoire spirituelle du XVIe siècle*, Paris 1937.

<sup>75</sup> 坂本満「聖エラスムスとエラスムス像」、『美術研究』1969年3、5月号。『渡辺一夫著作集』、12、74-5頁。Mansfield, *op.cit.*, 3は、本文をリーフデ号のエラスムス像に言及することから始めている。

<sup>76</sup> 註2参照。「重たい運命と衝撃、そして受苦と歓喜は、歴史的フマニスムス—そのフマニタスは狭く西欧的・キリスト教的・ローマ的であったに過ぎないが—から、全人類を概念としても現実性としても意識のなかへ取りこむ新たなフマニタスに、人間のフマニタスへ導く。」

<sup>77</sup> 岡美穂子「大航海時代と日本—イエズス会のアジア布教とコンベルソ問題」、豊島正之編『キリシタンと出版』八木書店、2013年、所収予定。

<sup>78</sup> 清水有子「近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考」東京堂出版、2012年、112-17、特に115頁に引く長崎キリシタンの要請文書中に「人文学」(*letras humanas*)が見出される。次の長大な論考にはフマニタスに相等する近代語が頻出する。高瀬弘一郎「キリシタン時代イエズス会の府内コレジオについて」(上)『史学』81巻1・2、2012年3月、1-59頁。(下)同書3、同年7月、355-402頁。根占献一「東西ルネサンスの邂逅—南蛮と彌寝氏の歴史的世界を求めて」東信堂、1998年、205頁。

である。

**注記**

本稿は、平成22年度～24年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究課題名「ヨーロッパ史における政治と宗教のダイナミズムと国家的秩序の形成」（研究代表者早稲田大学文学学術院甚野尚志）による研究成果の一部である。

（本学教授）